

## I 2019年度の東洋文庫

2019年度において東洋文庫が実施した諸事業の経過、及び内容の要旨は次の通りである。

尚、2020年に入り新型コロナウイルスが発生し、その感染が深刻化したことに伴い、感染拡大防止の観点から、2020年3月3日より共同研究室は6月1日まで、ミュージアムは6月24日まで、閲覧室は7月29日まで利用を一時的に休止した。又、職員に在宅勤務を導入する等、東洋文庫として対策に取り組んだ。

まず本年度内に生じた役員・職員の異動について述べる。6月の評議員会にて、任期満了となった理事4名の改選が行われた。榎原稔、濱下武志、平野健一郎、福澤武の各氏が再任された。又、田仲一成理事、鶴見尚弘理事がご退任となった。新たにリンダ・グローブ氏が理事に選任された。

任期満了となった評議員はいなかった。評議員は12名、理事は9名、監事は2名（前年度から理事1名減）の体制となる。

評議員会に引き続き開催された臨時理事会において、榎原稔理事が前年に引き続き理事長に選出された。又、業務執行理事（常務理事）に、濱下武志理事、平野健一郎理事が再任された。

10月には臨時評議員会を開催し、伊与部恒雄監事が退任。後任として柳井秀朗氏に監事に就任いただいた。

2020年3月に、ペーター・ツィーメ氏（ベルリン自由大学名誉教授）に名誉研究員にご就任いただいた。氏は古代中央アジア（ウイグル）の文献学を専門とされており、東洋文庫の専任研究員でもある。氏の参加により名誉研究員は現在13名、2018年4月にエリザベス・ペリー氏（ハーバード・エンチン研究所所長）にご就任いただいて以来の名誉研究員となる。

資金運用では、2019年度中に満期になった債券はなかった。債券（約24億1千万円運用）の平均利回りは前年に引き続き0.76%。株式（約4億3千万円運用）が高配当であったために平均利回りは3.97%（前年比0.1%増）となった。全体として、2019年度の運用利回りは1.25%となった。

本年度は名誉文庫員等4名の方より320万円、斯波義信文庫長より500万円

のご寄付をいただいた。又、経費については、節電を実施する等引き続き削減に努力している。

設備関連では、本館 6 階書庫の書架耐震補強工事を本年度も継続したほか、空調設備等の修理を行った。又、建物外周の照明、建物設備の補強などの修繕も行った。

当文庫のデータベースのアクセス数（訪問数）は月間約75万件となっている。本年度の当文庫の図書の増加は、購入2,092冊、受贈1,772冊、合計3,864冊であった。

東洋学講座は、前期に「中国法制史料読解入門」の共通テーマで、「中国歴史公文書読解入門—『中国近世法制史料読解ハンドブック』出版に寄せて」山本英史研究員（慶應義塾大学名誉教授）、「清代における家族生活と契約」岸本美緒研究員（お茶の水女子大学名誉教授）、「中華民国北洋政府期法院訴訟記録について」西英昭研究員（九州大学教授）、を開催した。

後期には、「木簡・竹簡資料への誘い（いざない）」の共通テーマで、「中国戦国時代の「非発掘簡」」小寺敦研究員（東京大学東洋文化研究所教授）、「秦漢時代の法律文書」太田幸男研究員（東京学芸大学名誉教授）、「漢簡が伝える中国古代の裁判」池田雄一研究員（中央大学名誉教授）、を開催した。

シンポジウム等としては、2019年12月に国際シンポジウム Structural Changes in the Modern Middle East: Revolution, Constitution, Parliament、2020年1月にはハーバード・エンチン研究所と共催の国際シンポジウム Books as Texts and as Objects: The Production, Circulation, and Collection of Knowledge in Asia and Europe を開催した。

研究資料の出版では、本年度は定期出版物 8 冊に加え、オンラインジャーナル 1 件、論叢類 4 冊を発刊・公開した。又、各種研究会を計312回開催し、合計参加人数は2,723名であった。受け入れ外来研究者 4 名（国外 3 名、国内 1 名）、外国人研究者への便宜供与は、アメリカ・中国等 9 カ国より、85名であった。日本学術振興会特別研究員 PD・RPD の受け入れはなかった。

ハーバード・エンチン研究所に対して、当文庫は毎年研究員 4 名の派遣応

募の資格を得ているが、本年度は4名応募したものの、いずれも不合格となった。その他、学術交流関連では、2019年12月に永青文庫より、コルディエ文庫の資料寄託を受け入れることが決定した。

当文庫の一般向けの活動を更に強化すべく、有料講座「東洋文庫アカデミア」を開催しているが、本年度は、「漢字の歴史と最新の動向」をはじめとして計29講座を開催し、延べ受講者は352名であった。更なる規模の拡大に努めたい。

ミュージアムでは、

- (1) 「インドの叢智展」2019年1月30日～5月19日
  - (2) 「漢字展—4000年の旅」2019年5月29日～9月23日
  - (3) 「東洋文庫の北斎展」2019年10月3日～2020年1月13日
  - (4) 「大清帝国展」2020年1月25日～5月17日（3月3日から閉幕日まで休館）
- を開催し、年間計54,470人にご来場いただいた。それぞれの図録を「時空をこえる本の旅」シリーズとして発刊した。又、これらの展示に関連した講演会、ワークショップほかイベントを約15回開催した。

本年度もミュージアムには、インド大使、アルゼンチン大使はじめ、多くのVIPの訪問を得た。2019年11月5日には創立記念日レセプションを開催した。

3月と11月には、六義園のライトアップに合わせた展示「六義園をめぐる歴史」を展示した。出張展示として、成蹊大学図書館における東洋文庫の展示は本年度も継続した。

株主優待（東洋文庫ミュージアム無料招待券）の利用状況については、三菱重工業、三菱商事、三菱総合研究所から合わせて12,933人にご来場いただいた。

前年度に引き続き本年度も、月刊のメールニュースの発刊、機関誌である『東洋見聞録』の刊行を行ったほか、展覧会サイクルに合わせて、校外学習、博物館実習制度によりそれぞれ実習生を受け入れた。又、展示について多数の新聞・雑誌等での報道があった。